

旭川市

井上靖記念館報

第6号



無形の財産を…

浦城 いくよ



沼津で行われていた「沼津文学祭」の二回目に、昨年度は井上靖が取り上げられました。一年間に渡り、講演、朗読、

アラカルト講座、文学散歩、シルクロード音楽祭等々、沢山の行事が行われました。

行事の一つとして、十一月中旬、自伝小説「しろばんば」の主人公、洪作少年が過ぎた伊豆湯ヶ島への二台の大型バスツアーに、市民と共に私も参加いたしました。

まずお墓に到着しました。お墓のまわりの遠く佐賀から贈られた「瓊花」という木には、赤い実がみごとについていました。五月か六月に黄色い十センチ位の花が咲くとは聞いていましたが、まさか、こんな赤い実がなるとは知りませんでした。「井上先生のお墓にも植えましょう」と、一メートル余りの苗木が佐賀から送られて来て六年がたちました。

平成十一年三月、「シルクロードの詩」という佐賀市文化会館で行われたイベントに参加するため佐賀へ伺った折、有明海に隣接した県森林公園で父が亡くなる三ヶ月前に、鑑真和上を讀んで書いた「若葉して」という碑文を初めて見学しました。日中文化交流のシンボルとして平成二年に和上陸記念碑が建立されたのです。佐賀は幾たびかの苦難の末、

盲目となった和上が上陸した所です。揚州から贈られたという瓊花が、碑の周囲一面に植えられていました。揚州にある大明寺は、和上が日本へ来ることを決意したお寺です。

一昨年秋、「天平の甕」が中国で前進座により上演され、私と主人は上海で観劇して揚州へも行って来ました。市花ということで瘦西湖というきれいな湖のまわりには、瓊花がいたる所に植えられていました。

瓊花の赤い実に感激して見とれている時、「井上先生はご家庭ではどんな方でしたか」という質問に私はハッと我にかえりました。よく受ける質問です。その時、お話をしたことを書いてみようと思います。

昭和二十五年、四十三歳で芥川賞を受賞して以来、晩年は別として昼も夜もいつでも書齋に正座して何かを書いていました。大変な努力家で精力的に仕事をしました。大変な家族と一緒にゆつくりご飯を食べたなどという思い出は、晩年になるまで覚えがありません。亡くなるまで、自分の作品のテレビすら殆ど見ませんでした。趣味に類するものは全部捨てて、全力投球をしていました。家庭的で穏やかといった父親ではありませんでした。高価な品物でもしめておかないで、普段に使用して肌ざわりや味わいなどを自然に身につけさせてくれました。

た。よいと思う文章に出合った時など、本や雑誌を嬉しそうに書齋から居間に持って来て、そこに居合わせた者に読んで聞かせていました。一緒に旅をした時には「どんな木がそこに植えてあるか、どんな形をした家が多いか等、ささいな事でも全部書きとめておきなさい。記憶はあてにならないよ」とよく言っていました。記しておけば本当によかったと思うことがよくありますがもう遅いです。

感謝しなければいけないのは、いろんな方たちに会わせてくれたということです。「今夜、〇〇さんが来宅されるので一緒に食事をしないか」とか、「挨拶をしに出て来なさい」とか、その時はいやだと思っていました。今思いますのに、それはとても大事なことでした。現在、私があるのは父がいろんな形でひき会わせてくれた方たちや、その周辺の人々に助けられている事が多いと思います。

まだまだ、とても書くことは出来ませんが、父は無形の財産を与えてくれました。ケチなことが大嫌いなザックバランで、人に上下をつけない几帳面な父でした。

（井上靖長女・井上靖記念館相談役）



「第二回沼津文学祭」に参加して

藤内英夫



昨年十二月、「井上靖と沼津」をテーマとした第二回沼津文学祭があり参加聴講してきた。プロگرامは講演、対談、朗読など多彩に展開して五時間近くに及んだが、その一部を報告したい。

「井上靖／人と作品」と題する基調講演は、新潮社刊「井上靖全集」を編集した曾根博義氏（日大教授）によるもので、井上文学を熟知している方ならではの懇切丁寧な解釈と解説は、時間を忘れさせてくれた。要旨は次のようなものだった。大きな足跡を残した井上文学の出発点は、金澤の四高在学中の三年生、二十二歳の頃と考えている。それまでの柔道漬けの生活から事情があつて退部し、以前から始めていた詩作に興味を移したあとで、同人誌に詩を発表するようになった時期に相当する。古風で人生派的な詩風はやがて散文詩の形式に変身し定着していった。その傍ら読み物小説を書き始め、探偵小説、サラリーマン小説、舞台脚本など多方面のジャンルに頭角を現わし、異才を発揮した。異なつた分野での小説にバランスよく筆を使い分け、同一人とは思えない作品を生み出していったこの頃の井上さんは、書くことの万

能選手だったと云つていい。

詩と小説といった二つの方向が統一されて再スタートしたのは昭和二十四年、出発点から二十年後の四十二歳の時に発表した「猟銃」と考えてよいと思う。これによつて井上文学は確立し、その後の作家としての輝かしい人生が始まった。

長い作家生活で膨大な量の作品を残した井上さんにとつてたゞ一つ不思議なことは、文学の目を開かせてくれた中学時代の友人達の詩や短歌から何の影響も受けなかつたらしいことで、その頃の短歌や俳句の類はほとんど残つていない。沼津中学五年生（十八歳）の時の短歌九首が「沼中、東高八十年史」（昭和五十六年発行）に収められているだけで、井上さん自身もその存在を忘れていたらしい。そのなかの一首



湯ヶ島小学校 校庭脇の詩碑

こちよき

衣のしめりよ 靄（もや）ふかき
灯ともし頃の 町をゆきけり

は、沼津市妙覚寺境内の文学碑に刻まれている。この歌の「わがふるさととは灯をともしけり」といった心境は、最晩年の作品「孔子」の中にも鮮やかに書き込まれていて、井上文学の出発点は中学五年生の頃まで更に四、五年溯ると見なければならぬ。

対談は井上さんのご長男の修一氏に曾根氏が質問する形で進められたが、修一氏の次のような話が心に残つた。

四十歳頃以前の父のことは知らないし、物心がついてからの父は仕事で忙しい毎日だったようで、一家団欒とか親子の会話とかいった記憶は薄い。机に向かつて原稿を書いているか、客と応対している姿だけが目に浮かんでくる。

叔父（井上さんの弟、達氏）の話によると、父の少年時代は「しろばんば」「夏草冬漣」にあるような遊び呆けてばかりではなかつたらしく、一応は真面目な努力家だったと考えてよいようだ。「机の前の畳はいつも凹んでいた」と聞かされたことを覚えている。

曾根さんの話の通り短歌や俳句はほとんど残していないが、自分には一句だけ記憶がある。父のお供をして大勢の山友達と穂高へ行つた秋、雪で山小屋に閉じ込められたことがあり、退屈紛れに初雪、水とか云つた季節で句会が始まった。そのとき父が残した生涯の一句は



湯ヶ島にある井上靖の墓

初雪や 君の唇も 冷たくて
これらの見聞や体験は、四十歳過ぎの父親しか知らない自分には意外であり、新鮮でもあり、また微笑ましくもあつた。

栗原小巻氏の朗読は井上さんの作品の中から「しろばんば」「夏草冬漣」「風林火山」などのほか、「詩」も数編読み聞かせてくれた。女優さんらしい豊かな声量と表現力で井上ワールドに誘い込んでくれ、いい時間を楽しませてもらった。

翌日は「あすなる物語」の舞台の一つとなつた市内の妙覚寺を訪ねたあと、伊豆湯ヶ島に向かった。こじんまりした集落の中のご実家跡や、「地球上で一番清らかな広場」と謳つた湯ヶ島小学校など廻つて、晩秋の穏やかな一日を過ごした。紅葉に囲まれた滑沢沢谷の「猟銃碑」まで足を伸ばして、最後に熊野山のお墓にお参りし、記念館の庭から拾つて行つたナナカマドの赤い実を何個かお供えして、井上さんゆかりの旅を締め括つた。
〈井上靖ナナカマドの会 会員〉

企画展

【井上靖／詩からの出発】

四月一日（金）―六月二十六日（日）

井上靖は沼津中学時代に藤井壽雄や岐部豪治らと出会い、詩作に目覚めます。

金沢四高時代、ある事情により柔道部を退部してからは、詩作に没頭して詩誌に作品を発表する傍ら、詩人との交流が深まります。爾来、靖の詩筆は絶えることなく、生涯を通して詩作を続けます。

この企画展では、靖の初期の短歌や特徴ある散文詩を中心に展示し、詩人としての井上靖の魅力を紹介しました。

展示の内容は、靖の詩歴をはじめ、沼津時代に創作した九首の短歌や、初めて活字となった行分詩や散文詩を展示し、初期の詩に萌芽する靖のみずみずしい感性を紹介しました。

次に靖の詩作に影響を与えた詩人たちの紹介に続き、『狐銃』や『漆胡樽』など小説の原形となった散文詩を展示しました。

後半には処女詩集『北国』から『星闌干』まで全八巻の詩集に加え、『シリア沙漠の少年』や山本和夫との共書『青春詩集』を展示し、井上靖の世界を紹介しました。



【雑誌に見る井上文学】

七月二日（土）―十月二日（日）

井上靖は戦後の混乱期に職業作家として自立し、小説の外に詩やエッセイ・美術評論など、多くの作品を新聞や雑誌等に発表しています。

この企画展では、『雑誌』というジャンルにスポットをあて、そこに発表された詩や小説、エッセイ等を自筆原稿や資料を交えて紹介しました。

第一章では、童話誌や教科書などに掲載された少女向け作品、第二章では終戦後、新人作家としてデビューした初期の現代小説を中心に展示しました。

第三章では、戦国の乱世に生きる人間の悲哀を著した歴史小説、第四章では作家・大岡昇平との『蒼き狼』論争に係わる資料を展示しました。

第五章には西域・シルクロードに関する紀行文、そして第六章では、凄絶な死と対峙した病床エッセイを紹介しました。

『雑誌』に発表された井上靖の作品を通して、戦災により廃墟と化した日本の復興とあゆみを共にしながら、人を見つめ、自然を見つめて、人々に「光」と「愛」を発信し続けた井上文学の魅力を紹介しました。



【井上靖／西域への夢】

十月八日（土）―十一月九日（月）

井上靖は凡そ三百五十篇ほどの小説を著し、数多くの名作を世に送り出しています。なかでも、中国・西域に関する歴史小説は、悠久の時の流れの中に翻弄される人間の儂さを描く傑作が多く、今もなお多くの人々に愛読されています。

この企画展では、「西域物」といわれる中国・シルクロードに関する歴史小説にスポットをあて、四部構成で紹介しました。

第一章『西域への憧憬』では、靖が西域への夢をはぐくんできた経緯、第二章『絲綢之路からの誘い』では、正倉院の御物と出会い、時空を超え西域へと夢を馳せる「日本物」を紹介しました。

第三章『蘇る沙漠の蜃気楼』では、西域のオアシスに興亡を繰り返した西域短編小説を紹介。第四章『流沙残照』では、「西域物」といわれる数々の作品が、今もなお多くの読者に愛読され、人々の心に「夢」と「潤い」を与えていることを紹介しました。

青春に憧憬を抱き、晩年に至っても情熱は冷めず。靖が生涯をかけて追い求めた「西域への夢」を紹介しました。

青年に憧憬を抱き、晩年に至っても情熱は冷めず。靖が生涯をかけて追い求めた「西域への夢」を紹介しました。



【随筆に見る「人間・井上靖」】

一月十四日（土）―四月九日（日）

井上靖は四十数年間にわたり、回想記をはじめ文学論、美術論、歴史論、人生随想など、極めて広範囲にわたるエッセイを書き残しています。靖が人生の節々において綴ったエッセイには、靖のものをみる目の確かさ、深さ、温かさとともに、青年時代から持ち続けた憧憬や理念が脈打っています。

この企画展では、靖のエッセイを「郷里・家族・邂逅」という観点に絞って、「人間・井上靖」の姿を紹介しました。

第一章『故郷は遠くにありて』では、遍転とする故里への望郷、第二章『萌芽する孤独感』では、靖の養育に深くかかわった者への感懐を紹介しました。

第三章『彷徨の時代』では、青春期における忘れ得ぬ人々との出会い、第四章『美との邂逅』では、記者時代に邂逅した芸術家たちへの評論を紹介しました。

第五章『穂高美し』では、『氷壁』のモチーフとなった「北鎌尾根山岳事故」と「ナイロン・ザイル事件」の資料を展示し、第六章『家族その愛』では、靖に対する家族の想いを紹介し、「人間・井上靖」の素顔に迫りました。

青年に憧憬を抱き、晩年に至っても情熱は冷めず。靖が生涯をかけて追い求めた「西域への夢」を紹介しました。



自主事業の概要報告

◆文学講演会

『おろしや国酔夢譚』を再読しよう！
とき 平成十七年六月十八日(土)
ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 工藤正廣氏(北海道大学教授)
昨年につき『おろしや国酔夢譚』についての講話。井上靖・桂川甫周・吉村昭の三人の作家が著した『おろしや国酔夢譚』の同一場面を朗読して比較考察をしました。塩尻曜子さんの朗読が各作品のイメージを具象化させ、三人の作家の主旨の特異性を際立たせておりました。

続いて、大黒屋光太夫の容姿や人物像、十八世紀当時のロシアの言語や文化について説明があり、小説を補完するよう示唆に富んだ内容でした。

最後に、靖がこの小説を書いた意図や、作品を通して見え隠れする日本と他国との外交関係などに話が及び、グローバルな視点から現在の日本を再認識させられる講演でした。



◆旭川文学散歩

とき 平成十七年七月九日(土)
見学先 東旭川・永山の句碑めぐり
講師 平野武弘氏(旭川実業高校講師)

天候に恵まれ、東旭川・永山方面の句碑八カ所を廻りました。最初に慶誠寺境内にある石田雨圃子の句碑を見学。雨圃子が北海道初のホトトギス派の俳人であり、大正期を代表する俳人で旭川の俳壇の第一人者であったことを知りました。



続いて東旭川屯田公園内の西山東溪の句碑や、旭山公園内にある藤田旭山、工藤力夫、新明紫明、塩野谷秋風の句碑を見学しました。

午後は永山屯田公園で阿部みどりの句碑や、永山村歌の碑、屯田碑も併せて鑑賞の後、永山神社境内を散策。最後に護国神社の深谷雄大の句碑を鑑賞しました。

講師の朴訥とした温かい語り口が、鑑賞が難しい俳句のイメージを自由に広げ、楽しむことができました。

◆夏休みお話し会 ①
とき 平成十七年七月二十七日(水)
ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 福田洋子氏(旭川こども富貴堂店長)
こども富貴堂スタッフによる絵本の読み聞かせ。最初に旭川生れの小説家・井上靖の『ひと朝だけの朝顔』、次に旭川生れの絵本作家・あべ弘士さんの『どうぶつ句会』、続いて旭川在住の絵本作家・堀川真さんの『ちいさなごり』を朗読後、アイヌユーカラが原話の『けちんぼお

かみ』、最後に『しんちゃんのはなび』を読み聞かせてくれました。

◆夏休みお話し会 ②
とき 平成十七年八月三日(水)
ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 上森伸子氏(旭川おはなしの会代表)
上森伸子さんが井上靖の『くもの巣』『ほくろのある金魚』や、ヨーロッパの昔話を中心に読み聞かせてくれました。

対象が三歳から六年生までと幅広く、集中力の持続が心配でしたが、手遊びなど演劇的要素をふんだんに取り入れ、趣向を凝らした楽しいお話し会でした。

靖の子供向けの作品は多くはありませんが、このお話し会を通して郷土の作家・井上靖を広く知ってもらいました。

◆ロビーコンサート
「音楽と詩の楽しみ」
とき 平成十七年八月二十日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ
演奏者 萩原靖弥氏・貝森康夫氏
朗読 佐藤 鍵氏

第一部は楽器の紹介を交えながら「ガボット」や「子守歌」など、親しみの持てる曲を中心とした演奏会でした。

第二部「詩の朗読」

では六篇の詩を朗読、「飛天と千仏」の詩はロビーにある金子鴨亭書の屏風を鑑賞しながら朗読に聞



き入りました。そして「星闌干」や「ナカマドの赤い実の洋燈」の朗読では、「星に願いを」や「雪の降る街を」が演奏され、靖の詩と佐藤鍵氏の重厚な朗読が調和し雰囲気醸し出していました。

第三部は「大きな古時計」や「マイ・ウェイ」など楽しい曲を演奏。井上文学や記念館に興味を持ち、利用する契機となってくれることを願いました。

◆井上靖の映像の世界

とき 平成十七年九月十日(土)
ところ 井上靖記念館ラウンジ
上映ビデオ 『天平の薨』

井上靖の作品は、これまでに四十本近くが映画化されています。その中から靖の歴史小説の代表作である『天平の薨』



を上映し、映像を通して市民に井上文学に親しんでもらいました。参加者の中には、既にこの作品を鑑賞した方もいたようですが、昔を思い出しながら思い思いに映像を楽しんでおり、中には感激して涙を落としている人もおりました。

上映時間は百五十二分と少し長かったのですが、途中に休憩を挟みながら鑑賞しました。明快なストーリーと明確な主題が参加者に深い感銘を与え、感謝の言葉を残しながら帰路についていました。

◆第一回朗読会

「井上靖の世界を読む」

とき 平成十七年九月十七日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 袖山基子氏(旭川リーディングクラフ代表)

講師から現代の朗読の潮流、朗読の心構え、ポランテアによる朗読の活動例、実際に朗読をするときの手法など、朗読全般について講話がありました。

朗読には俳優などが行う演劇的な朗読と、ポランテア等が行う音声訳の二種類があります。今回は後者の要素を含んだ朗読の手法について、フリーアナウンサーで福祉ポランテアに携わっている袖山基子氏から実践例を交えて詳細な説明がありました。

後半には『幼き日のこと』や『流星』『友』など四篇の短詩が朗読され、参加者は講義の内容を念頭におきながら、講師の朗読に聞き入っていました。

◆第二回朗読会

『井上靖の世界を聞く』

とき 平成十七年十月十五日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 二木 てるみ氏(女優)

今回の朗読会は、二木てるみさんの朗読を中心にフリートークを交え、昼と夜の部の二回行われました。



朗読には靖

の『風わたる』という短編小説が取り上げられました。二木さんの情感のこもった朗読は、伊豆の美しい自然を背景に、息子とその交際者に対する母の心情の変化を繊細に表現していました。

また、朗読の効果を高めるため、札幌在住の音楽家・扇柳徹氏とあらひろこさんによる演奏が流れ、北欧の伝統楽器を主体とした哀愁に満ちた旋律は朗読と相映って、聴衆を井上文学の豊かな情感の世界へと魅了していました。

◆井上靖の映像の世界

とき 平成十七年九月二十四日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

上映ビデオ 『猟銃』

昭和二十四年に発表された『猟銃』は、井上靖の作家としての地位を確立した作品といわれています。登場人物の背景や心理描写の繊細さ、書簡形式による構成など、初期における現代小説の名作です。



この作品は昭和三十六年に映画化され、愛し愛される者の喜びと苦しみを詩情豊かに描き、女優・山本富士子や岡田茉莉子の好演も人気の一因となりました。上映時間も九十八分と短く、参加者の多くが初期のカラー映画を懐かしみ、郷愁に浸りながら鑑賞していました。

◆第一回文学講座

とき 平成十七年十月二十九日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 東 延江氏(北海道立文学館評議員)

講話は沼津中学時代における藤井壽雄の短詩との出会いからはじまり、金沢四高時代に靖の詩作に影響を与えた詩人たちと、その作品が紹介されました。

続いて、靖の初期の行分詩には平易な言葉のもとに、母の期待に苦悩する作品が散見されることや、散文詩への移行が小説家への自立を促す契機となったことなどが、講師の詩人としての感性や知識、経験談などを交えて具体的に紹介されました。

◆第二回文学講座

とき 平成十七年十一月十二日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 片山晴夫氏(北海道教育大学教授)

演題は「井上靖文学と彼の『友人』たち」。最初に『友人』の定義づけがなされ、井上文学の出发点である詩作に影響を与えたモダニズムの詩人たちや、堀辰雄主宰の『四季』や『詩と詩論』に関心が移行した経緯が説明されました。

さらに、ヴァレリーの「詩の言葉は舞踏であり、小説の言葉は歩行である」という印象深い言葉を引用しながら、当時の詩人たちが新時代にふさわしい芸術作品として詩の創造を目指したことや、詩人は言語の探求者であり、固定観念に囚

われない自由表現を模索する芸術家であるという講話がありました。

後半は『蒼き狼』論争を引き起こした作家・大岡昇平と靖の

関係について講話があり、最後に『しろばんば』をもとに井上文学の主題である「孤独」と「彷徨する心」について考察がなされました。

◆読書会

とき 平成十八年一月二十八日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 秋岡康晴氏(旭川藤女子高等学校講師)

井上靖の自伝的小説『あすなる物語』の第一章「深い深い雪の中で」を朗読し同じ章のアニメ映画を鑑賞しました。

朗読を通し、洪作少年が邂逅と別離を重ねながら成長していく姿が詩情豊かに描写されており、靖の代表作品であることを改めて知りました。

目と耳を通しての読書会は、一人で黙読するのとは別の心象の世界を想起させ、活字と映像を比較することにより、文学の意義について認識を新たにししました。



一年間のあゆみ

- ▼四月一日～六月二十六日
 - *第一回企画展
 - ・「井上靖／詩からの出発」
- ▼六月十八日
 - *文学講演会
 - ・演題 『おろしや国酔夢譚』を再読しよう！
 - ・講師 工藤正廣氏（北海道大学教授）
- ▼七月二日～十月二日
 - *第二回企画展
 - ・「雑誌に見る井上文学」
- ▼七月六日
 - *第一回井上靖記念館運営協議会
 - ・会場 旭川市彫刻美術館
- ▼七月九日
 - *旭川文学散歩
 - ・見学先 東旭川・永山の句碑めぐり
 - ・講師 平野武弘氏（旭川実業高校講師）
- ▼七月二十七日
 - *第一回夏休みお話会
 - ・講師 福田洋子氏（旭川こども富貴堂店長）
- ▼八月三日
 - *第二回夏休みお話会
 - ・講師 上森仲子氏（旭川おはなしの会代表）
- ▼八月二十日
 - *ロビーコンサート
 - ・音楽と詩の楽しみ
 - ・演奏 萩原靖弥氏 他
 - ・朗読 佐藤 鍵氏
- ▼九月十日
 - *第一回「井上靖の映像の世界」
 - ・上映 『天平の鶯』
- ▼九月十七日
 - *第一朗読会「井上靖の世界を読む」
 - ・講師 袖山基子氏（旭川リーディングクラブ代表）
- ▼九月二十四日
 - *第二回「井上靖の映像の世界」
 - ・上映 『甞銃』
- ▼十月八日～一月九日
 - *第三回企画展
 - ・「井上靖／西域への夢」
- ▼十月十五日
 - *第二朗読会「井上靖の世界を聞く」
 - ・講師 二木てるみ氏（女優）
- ▼十月二十九日
 - *文学講座①「詩と井上靖」
 - ・講師 東延江氏（北海道立文学館評議員）
- ▼十一月八日
 - *第二回井上靖記念館運営協議会
 - ・会場 旭川市彫刻美術館
- ▼十一月十二日
 - *文学講座②
 - ・「井上靖文学と彼の『友人』たち」
 - ・講師 片山晴夫氏（北海道教育大学教授）
- ▼十一月十五日～十七日
 - *浦城いくよ相談役来館
- ▼一月十四日～四月九日
 - *第四回企画展
 - ・「随筆に見る『人間・井上靖』」
- ▼一月二十八日
 - *読書会
 - ・講師 秋岡康晴氏（旭川藤女子高校講師）
- ▼二月二十四日
 - *相談役会議
 - ・会場 東京

平成十八年度事業のご案内

- 《企画展》 * * *
 - 第一回企画展
 - *「井上靖／詩と生涯」
 - ・四月十一日～六月十八日
 - 第二回企画展
 - *旭川ゆかりの文学者く板東三百展
 - ・六月二十四日～七月二十三日
 - （旭川文学資料友の会共催）
 - 第三回企画展
 - *「井上靖と歴史小説（日本編）」
 - ・七月二十九日～十月二十九日
 - 第四回企画展
 - *「井上靖／西域への夢（Part II）」
- 第五回企画展
 - *井上靖と現代小説
 - ・二月三日～三月二十五日
- 《自主事業》 * * *
 - 文学講演会
 - 六月二十四日
 - 文学散歩
 - 七月八日
 - 夏休みおはなし会
 - 七月二十八日
 - ロビーコンサート
 - 八月三日
 - 朗読会
 - 八月二十六日
 - 井上靖の映像の世界
 - 九月～十月
 - 文学講座
 - 十月～十一月

《年度別入館者数》

年度	人数
平成5年	12,703
平成6年	20,385
平成7年	16,599
平成8年	14,893
平成9年	14,639
平成10年	16,832
平成11年	15,848
平成12年	13,536
平成13年	11,450
平成14年	12,475
平成15年	13,496
平成16年	10,077
平成17年	7,772
総入館者	180,705

職員異動のお知らせ

- ▽転出
 - ◇臨時職員
 - *菅沼由美子（平成十七年二月～同年十一月）
 - ◇嘱託職員
 - *土井 昌信（平成十七年四月～翌年三月）
- ▽転入
 - ◇臨時職員
 - *立田 純子（平成十七年十二月～）
 - ◇嘱託職員
 - *加藤 雅之（平成十八年四月～）

編集後記

▽新春早々、井上靖の『風林火山』や『水壁』が放映され、そのお陰で厳冬の入館者が若干増えました。そのような折、東京在住の本庄健男氏が来館くださり、『水壁』に関する貴重な資料を送付してくださいました。お陰様で企画展を充実することができ、嬉しく思っています。紙上をお借りしてお礼申し上げます。